〔東京家政大学研究紀要　第23集(2), p. 199～203, 1983〕

本学短大被服専攻生の被服平面構成実習について

——大裁女単長着製作における実態——

斉藤トシ・寺田恭子

(昭和57年9月29日受理)

The Class of Clothing Construction of Kimono and Students at Tokyo Kasei Tanki-Daigaku

—— Sewing of Unlined Kimono ——

Toshi SAITO and Kyoko TERADA

(Received September 29, 1982)

緒　　言

本短大被服専攻生の被服平面構成の指導にあたり，学生の入学当初の和服に関する知識，および技術の実態を知り，また入学後の学習において，運針その他，単長着を製作の際の種々の状況について実態を考察し，指導上の一指針とする.

実験方法

被験者として，本学短大被服専攻生のうち104人を対象とし，つぎの項目について昭和56年4月中旬アンケート調査（集団記入法)，および2回の運針実験をおこなった.

1　まず4月中旬，大裁女単長着を始める前につぎのアンケート調査をおこなった.

(1)　高等学校での専攻別

(2)　中学校，高等学校時代に製作したもの

(3)　中学校，高等学校時代の運針の練習について

①　運針練習に使用した針と指ぬき

②　運針の練習状況

(4)　入学時に「和服」および「和裁」について，つぎの項目をどの程度知っていたか.

①　「運針」という名称を知っていたか.

②　「きもの」の形について考えたことがあるか.

③　「きもの」の各部の名称，寸法について.

④　「きもの」の各部の名称で知っていたもの.

2　つぎに7月中旬，大裁女単長　製作終了後，　つぎのアンケート調査をおこなった.

(1)　大裁女単長着の製作に最も困難を感じた部分

(2)　大裁女単長着の製作に要した各自の総時間

平面構成の授業の実習時間毎に各自に要した時間を記入させ，また授業以外に各自が実習した時間を加えて算出させたもの.

(3)　大裁女単長着を製作中の疲労の自覚症状

(4)　大裁女単長着の作品が完成した時の感想

3　運針実験

(1)　第1実験

実験時期は4月中旬，すなわち入学当初につぎの要領で，実験をおこなった.

・材料

布：晒木綿の並幅，長さ1mのもの.

針：印針の短針で各自の指に合った長さのもの.

糸：木綿の三子糸

・実験方法は，作業開始前に10分間休憩した後20分間の運針をおこなった.

・評価の方法

まず，学生各自に自覚をもたせるために，つぎの5段階法により自己評価をさせ，それと同時に指導者も同様の方法で評定した.

評価基準

A．大変上手に縫える

B．まあ上手に縫える

C．指が少し動いて何んとか縫える

D．指が殆んど動かないが，どうにか縫える

E．指も動かないし，針目も不同でどうにもならない

(2)　第2実験

実験時期は9月中旬，すなわち単長着2枚（女物，

男物）製作終了後，第１回目実験と全く同様の方法で実験および評定をした．

結果および考察

４月中旬，大裁女単長着の製作を始める前に実施したアンケート調査結果の考察

１　表Ｉは高等学校における専攻別を示したもので，被験者104人中，普通科専攻が100人で，家政科専攻が４人で，殆んどの者が普通科を専攻していた．

表Ｉ　高等学校での専攻別

	実　数(人)	%
普 通 科	100	96.2
家 政 科	4	3.8

表Ⅱ　中学校･高等学校時代に製作した主なもの

	実数(人)	%	縫い方別 ①		②		③	
			実数(人)	%	実数(人)	%	実数(人)	%
スカート	98	94.2	57	58.2	0	0	41	41.8
ブラウス	84	80.8	41	48.8	0	0	43	51.2
ワンピース	86	82.7	54	62.8	0	0	32	37.2
パジャマ	99	95.2	63	63.6	0	0	36	36.4
浴　衣	25	24.0	4	16.0	15	60.0	6	24.0

縫い方別　①ミシン縫い　②手縫い　③ミシンと手縫い

２　表Ⅱは本学入学前に，中学，高校時代に縫ったものを示したもので，パジャマ，スカート，ワンピース，ブラウスが圧倒的に多く，なかでもパジャマは99人(95.2%)，スカートは98人（94.2%）で殆んどの学生が縫っていることがわかった．これは，生徒の日常着として最も身近なものであり，家庭科の教科書にも取り扱われているためと思われる．ワンピース，ブラウスも86人（82.7%），84人（80.8%）とその人数は多くなっている．またその手法をみると，ミシンのみで縫ったものが最高で，パジャマの63人（63.6%），低いものでブラウスの41人（48.8%）で残りの人はミシンと手縫いを併用している．これはミシンの使用にまだ馴れないためと，また家庭にミシンのない生徒もあるかと思われる．その他スカート，ワンピースにおいても同様の傾向が現われている．浴衣を縫ったものが25人で，そのうち手縫いが15人で残りがミシンおよびミシンと手縫いの併用である．

表Ⅲ-1　中学・高校で運針練習に用いた針と指ぬき

		実 数(人)	%
針	短　針	90	94.7
	長　針	5	5.3
指ぬき	使用した	81	84.4
	使用しない	15	15.6
指ぬきの型	普 通 型	59	96.7
	皿　型	2	3.3

注）未解答者がありました。

表Ⅲ-2　中学・高校での運針の練習状況

	実数(人)	%
被服の時間毎に５分～15分	5	4.8
被服の最初の時間だけ 授業中時々 作品を製作する前 授業中１度だけ	14	13.5
全く練習しなかった	85	81.7

３　表Ⅲ－１は中学，高校で運針，また運針に用いた針と指ぬきの使用状況を示したものである．長針を用いたものが５人（5.3%）で，その他は短針を用いていた．指ぬきの使用は81人（84.4%）で，使用しないものが15人（15.6%）もあり，裁縫の基本である運針にはあまり力を入れていないことがうかがえる．長針使用者５人に対しても，長針用指ぬきの皿型を使用したものが僅か２人で残り３人は指ぬきを全く使用していない．これらによって，中学，高校では運針の技法にはあまり重点をおいていないことが考えられる．

表Ⅲ－２は本学入学前に，中学，高校で実施した運針練習の状況を示したもので，全く運針練習をしなかったものが85人（81.7%）で，中学で家庭科の時間毎に５分～15分練習したものが僅かに５人（4.8%），その他は教材を縫う前に少し練習をし，また授業中時々などで，運針練習には特に時間をかけていないことがわかった．

表Ⅳ　本学入学前の和服および和裁についての知識

		実数(人)	%
運針という名称	知っていた	81	77.9
	少し知っていた	12	11.5
	全く知らなかった	11	10.6
きものの形について考えたこと	大いにある	8	7.7
	少しある	57	54.8
	全くない	39	37.5
きものの名称・寸法について考えたこと	大いにある	8	7.7
	少しある	39	37.5
	全くない	57	54.8
きものの各部の名称で知っていたもの	袖	103	99.0
	振	46	44.2
	袂	27	26.0
	身頃	93	89.4
	衽	46	44.2
	衿	101	97.1
	共衿(掛衿)	48	46.2
	肩当	48	46.2
	居敷当	43	41.3

4　表Ⅳは本学入学前に「和服」および「和裁」について学生の知識を表わしたもので，「運針」という言葉を知っていたものが81人（77.9%）に対し，全く知らないものが11人（10.6%）もあった．「きものの構成について考えたことがありますか」に対しては，」大いにある』が８人（7.7%）と少ないが，「少しある」が57人（54.8%）もあり，「全くない」が39人（37.5%）あった．「きもの」の名称，寸法について考えたことに対しては，袖，身頃，衿は圧倒的に多く，103人（99.0%），93人（89.4%），101人（97.1%）と何れも殆んどの人が知っており，その他，振・衽・共衿（掛衿），肩当，居敷当なども約半数近くの人が知っていた．これらの学校において勉強した人もあろうが，日常生活のなかで着物に接して覚えたことも多いと考えられる．

「和服の寸法について考えたこと」は「大いにある」は８人（7.7%）と少なく，「少しある」が39人（37.5%），「全くない」が57人（54.8%）と非常に多くなっている．これは自分自身きものを縫ったことのないものにとっては当然のことと考えられる．

つぎに７月中旬，大裁女単長着製作終了後におこなったアンケート調査結果の考察．

表Ⅴ　大裁女単長着の製作に最も困難を感じた部分

		実数(人)	%
袖		13	12.5
背縫		0	0
肩当		1	0.96
居敷当		3	2.9
脇縫および縫代始末		16	15.4
袖付および縫代始末		18	17.3
衿下紆、裾紆		3	2.9
衿付		76	73.1
衿紆	三ッ衿芯入	35	33.7
	衿先縫	50	48.1
	衿紆	35	33.7
共衿かけ（掛衿）		34	32.7
袖付および縫代始末		11	10.6

1　表Ⅴは大裁女単長着の製作で困難を感じたところを示したもので，衿付が76人（73.1%）が最も多く，三衿芯入，衿先縫，衿紆，共衿かけが35人(33.7%)，50人（48.1%），35人（33.7%），34人（32.7%）と他の部分に比べて困難を感じた率が高くなっている．すなわち，衿に関する部分が最も困難を感じ，その他の部分は困難の率が低くなっている．

2　表Ⅵは大裁女単長着の製作に要した各自の総時間を２時間単位で現わしたもので，最も所要時間の少ない

表VI　大裁女単長着に要した各自の総時間

	実数(人)	%
24時間以上～26時間未満	1	0.96
26　〃　～28　〃〃	2	1.9
28　〃　～30　〃	14	13.5
30　〃　～32　〃	25	24.0
32　〃　～34　〃	32	30.8
34　〃　～36　〃	18	17.3
36　〃　～38　〃	12	11.5

表VII　大裁女単長着を製作中の疲労の自覚症状の主なもの

	実数(人)	%
眼がつかれる	74	71.2
眼がぼんやりする	14	13.5
眼がちらつく	12	11.5
頭がいたくなる	20	19.2
頭がぼんやりする	37	35.6
頭がのぼせる	7	6.7
指に針先がささって痛い	38	36.5
指の皮がむける	31	29.8
指がつかれる	17	16.3
指先が痛い	27	26.0
指ぬきの所が痛い	6	5.8
手がだるい	29	27.9
首がだるい	39	37.5
首が痛い	39	37.5
体がだるい	13	12.5
口がねばる	12	11.5
腰がいたい	19	18.3
肩がこる	85	81.7
のどが渇く	26	25.0

24時間以上～26時間未満が１人で，所要時間の最も長い36時間以上～38時間未満では人数が12人となっている．平均的に一番多い人数は，30時間以上～34時間未満で，ここで25人（24.0%）と32人（30.8%）の多数になり，両者で57人と約半数以上になる．なお，この所要時間の算出には各自多少の誤差もあり，あまり正確な時間と考えられない点が異感である．

3　表VIIは製作中の疲労の自覚症状を示したものである．「肩がこる」が85人（81.7%），「眼がつかれる」が74人（71.2%）と非常に多く，その他は「頭がぼんやりする」が37人（35.6%），「首がだるい」，「首がいたい」が何れも39人（37.5%）とかなりの数値を示している．なお「指に針がささっていたい」なども多く，これらは，何れも学生が裁縫になれないために，非常に苦労していることがわかる．

4　表VIIIは大裁女単長着を縫い終えての感想として，「非常に感激した」ものが65人（62.5%）と半数以上で，「少し感激した」ものが34人（32.7%）もあり，殆んどのものがよろこびを感じている．それだけに製作中，学生にとってはいかに苦労であったかを考えさせられる．

表VIII　大裁女単長着が完成したときの感想

		実数(人)	%
感激	非常に感激した	65	62.5
	少し感激した	34	32.7
	特に感激しなかった	5	4.8
苦労	非常に苦労した	73	70.2
	少し苦労した	30	28.8
	特に苦労しなかった	1	0.96
意欲	非常に意欲がわいた	22	21.2
	少し意欲がわいた	62	59.6
	特に意欲はわかなかった	20	19.2
興味	非常に興味がわいた	23	22.1
	少し興味がわいた	69	66.3
	特に興味はわかなかった	12	11.5
解放感	非常に解放された	70	67.3
	少し解放された	34	32.7
	特に感じなかった	0	0

「非常に苦労した」が73人（70.2%），「少し苦労した」が30人（28.8%）で両者で103人にもなり，これには縫い方の困難もあり，また時間的問題も含まれていると思う．つぎに「意欲がわきましたか」では，「非常にわいた」が22人（21.2%），「少しわいた」が62人（59.6%）で両者で84人となり，興味の点でも「非常に興味がでた」が23人（22.1%），「少し興味がでた」が69人（66.3%）と多くなっている．解放感では，「非常に解放感を感じた」ものが70人（67.3%）もの多数で，「少し感じた」が34人（32.7%）で殆んどのものが縫い終えて，ほっとした感じである．

表IX　運針実験の評価

			A	B	C	D	E
第1実験	自己評価	実数（人）	0	1	15	46	42
		%	0	0.96	14.4	44.2	40.4
	指導者評価	実数（人）	0	4	27	48	25
		%	0	3.8	26.0	46.2	24.0
第2実験	自己評価	実数（人）	0	9	81	12	2
		%	0	8.7	77.9	11.5	1.9
	指導者評価	実数（人）	2	19	48	32	3
		%	1.9	18.3	46.2	30.8	2.9

5　表Ⅸは2回の運針実験，すなわち入学時の4月と大裁単長着2枚（女物，男物）を製作後の9月に実施した結果を示したものである．入学時の第1実験においてE段階，D段階の自己評価で42人（40.4%），46人(44.2%）で，教師の評価では，E・Dが25人（24.0%）と48人（46.2%）を現わしているのに対し，第2実験においては，教師の評価でE・Dが3人（2.9%）と32人（30.8%）と少なくなっている．入学時ではA段階では0人で，B段階で4人（3.8%）あったものが，第2実験においてはAが2人（1.9%）と数は増し，C段階において第1実験で27人（26.0%）が，第2実験で48人（46.2%）と非常に多くなり，練習効果が顕著に現われている．練習の結果「指も動かないし，針目も木同でどうにもならない」，「指が殆んど動かないがどうにか縫える」のE・D段階の人が第2実験で少なくなり，中間であるC段階が最も多くなり，第2実験の自己評価においても同様の傾向がみられる．これは各自に多少の自信ができたためと思われる．

要　　約

被験者104人中，96%のものが高等学校において普通科を専攻しており，本学入学までに裁縫の基礎である運針練習を全然しなかったものが85人（81.7%）もあり，中学，高校で多少の運針練習をしたものでも，指ぬきを使用しないまま練習をしているものもある．これは運針の重要性については充分理解しながらも，高校では運針練習にあまり重点をおかないのも当然と思われる．

本学入学後の練習の結果，短期間に多くのものがその効果が顕著に現われ，第2実験の自己評価においても同様の傾向がみられるのは，各自に多少の自信ができたためと思う．また和服の基本である大裁女単長着についても，その知識を深め，着物に対しての関心が高められ，少ない時間のなかを困難な技術を修得して，完成した作品には愛着の念と，自分で着物が縫えるのだという，ある程度の自信と喜びを感じることができたと思う．

なお，アンケート調査内容，また被験者数などに問題点もあるが，短大被服専攻生の入学後の約6ケ月間の平面構成実習の実態を，各面から考察できたと思う．

参考文献

1)　大島正光：疲労の研究，同文書院，東京，1976